



シンバイオ製薬株式会社 (SymBio Pharmaceuticals Limited)

【設立】2005年3月
 【資本金】15億3355万円
 【代表者】代表取締役社長兼CEO 吉田文紀 三栄ビル
 【本社】東京都港区新橋5-23-7
 【連絡先等】TEL:03-5472-1125
 URL:http://www.symbiosis.co.jp/

「打率6割以上」の製薬企業に

「業界のイチローをめざす」
 シンバイオ製薬を創業した05年、吉田文紀社長が宣言した「打率を高め、ヒットを量産する」経営スタイルは、ブロックバスターという「ホームラン」志向を強めてきた大手製薬企業に対するアンチテーゼである。

製薬企業が、1品目で数千億円を稼ぎ出す新薬を抱えてしまうと、数十億円規模の市場は魅力に乏し

アステラス製薬の独子会社から、開発第1号として抗がん剤「ベンダムスチン」の国内ライセンス導入を果たした。現在、非ホジキンリンパ腫の適応で第 相試験を進めている。

今年4月に、中国などアジア4カ国のライセンスも取得、アジア市場の開拓を狙うほか、多発性骨髄腫などの適応拡大も視野に入れ、欧米のライセンス企業（米セファロン、英ムンディファーマ）と連携して、ライフサイクルマネジメントにも力を注ぐ方針。吉田社長は、適応拡大が順調に行けば、「100億円程度の売上げは期待できる」と指摘する。

今年2月には、米アベールファーマシューティカルズから制吐剤「A1001」を導入した。従来



吉田社長はこうしたUMNsを「空白の治療領域」と表現する。「500億円規模の新薬を、毎年市場に出さなければならぬような大手の社長さんも興味は持っているが、会社としては手が出せない」治療の空白を埋めることが、「共創・共生（symbiosis）」を掲げるシンバイオの企業理念となっている。

経営資源は「志」と「ノウハウ」

シンバイオを率いる吉田社長は、80年に診断薬や分析機器などを手がける米バイオラッド・ラボラトリーズの日本法人社長などを経て、93年にバイオベンチャーの草分け的存在である米アムジェンの日本法人立ち上げに携わったことで知られる。今や国内トップの武田薬品を売上高で上回る大企業となったアムジェンの米本社社長の地位をなげうって、3度目の創業に踏み切った理由は「ひとえに「志」と言い切る。

国内に数多く存在するほかのバイオベンチャーの多くは、第 相ハウがなければ簡単には真似できない」と鷹揚だ。

「第二の波」を起すために

「志とノウハウ」に支えられた事業モデルを裏打ちをするのが、開発候補に対し、医学的な評価を加えるサイエンティフィック・アドバイザリー・ボード（SAB）の存在である。

吉田社長の古巣であるアムジェンのジョージ・モトソン前上級副社長をはじめ、アベンティス・フアーマ（現サノフィ・アベンティス）で研究所長も務めたロバート・ルイス前上級副社長、竹内勤・埼玉医科大学副学長といったメンバーが、SABという合議体を構成し、パイプライン戦略の意思決定を下す。

承認取得後の自社販売も視野に入れていた。自前のセールスフォースを持つ分、コストも増大するが、自社で承認を取得し、地道に販売していく体制を築かなければ、「バリウチエーンは構築できない」と、吉田社長は強調する。

前期までを自社で手がけ、新薬の有効性を理論的に証明するブルー・オブ・コンセプト（POC）を取得し、その後は、大手製薬企業にライセンスを供与するというスタイル。これに対し、シンバイオは、「欧米ですすでに開発後期以降にある新薬をライセンス導入し、承認に繋げる」という戦略を採る。海外ですすでに承認に漕ぎ着けたか、臨床開発の後段階にある新薬を日本に導入する手法は共通するが、海外でのPOC取得を軸に、日本でも上市できる確率が高い新薬、言い換えれば「狙い球」にターゲットを絞り込むことで、打率を上げる。創業の川上に位置する自社研究部門は持たない代わりに、新薬の目利き、ノウハウが武器となる。

投資家に対し、「導入後5年以内に国内上市する」との公約を掲げ、年1品目ペースの導入を目標としている。世界中の製薬企業やベンチャーを回り、これまで吟味した155品目の中から、2品目のライセンス契約を結んだ。まず、創業間もない05年12月に、

フィードルの間隙を突くバンドヒットでも、重ねれば得点に至る。大手メーカーのような、強振は狙わないが、ブロックバスターでは決して満たせない、治療の空白を埋めることがバイオベンチャー共通の使命だとすれば、シンバイオはバイオベンチャーの中でも異質な存在だ。

米国では、アムジェンが80年、ジェネンテックが76年の創業と、バイオベンチャーの世界は30年の歴史しかないが、こうしたバイオベンチャーのバイオニアが、成功モデルを築いてきた。一方で、2000年頃からバイオベンチャーの第1次起業ブームを迎えた日本では、いまだに自力で新薬を市場に出したベンチャーは存在しない。

08年の株式上場をめざすシンバイオだが、不振が続く日本のバイオベンチャーにあつて、「第二の波を起こしたい」と成功への意欲を示す吉田社長は、「開発品が3品目あれば、2品目は成功させないといけない」と語る。

実現すれば業界屈指の「6割打者」が誕生する。